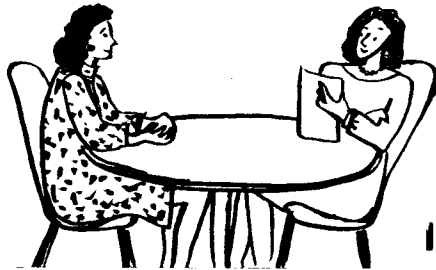


サロン・あべの

<サロン・あべの>NO. 36

平成 元年 6月17日(土) 発行



私のコミュニケーション

今年のサロン・あべののテーマはコミュニケーション。そこで今回はAさんに、様々な人との関わりを「私のコミュニケーション」として語っていただくことにしました。

——小さい頃、家庭内で障害者としてのハンディを何か感じましたか？
Aさん 小学校一年の二期期にはしかの後、熱が下がらなくて、動けなくなつたのですが、これが後から考えるとリユーマチ熱。当時、私の母や祖母は障害者という言葉は知らなかつたと思いますね。この子は身体が弱いのだと考えていたようです。ですから、動けるようになって臆病で一人で外にでることが出来ませんでした。家の中では過保護ということはなかつたですね。できなくても何でも知らないといけないという考えで。

——どなたの影響を一番受けましたか？

Aさん 妹ですね。妹は家の中の私の世話をしてくれました。服の脱ぎ着やふとんのあげおろし、立ったり、座つたりの介助など、気まづくなつたときでも手伝ってくれました。

母は休みの日に私を背負つて映画を見に連れていってくれたり、よく本を買ってきてくれましたが、外の情報は妹を通じて入ってきましたね。妹の友達の家に来たとき、絵を書いて遊んだり、妹が高校へ入つてからも体育会や文化祭によんでくれたり・障害者の兄弟がいるということを表へ出したがらないという話はよく聞きますが、会社に入つてからも、映画や芳音の公演やコンサートに連れていってくれたり、一緒に倉敷へ行つたりしました。

——家族以外の人々との出会いは？
Aさん 洋裁学校を終えて、新聞の記

事や文通仲間から「まごころ」という会を知り、粉浜で開かれる例会に行きだしました。そして自分も障害者の一人だと気が付いたのです。

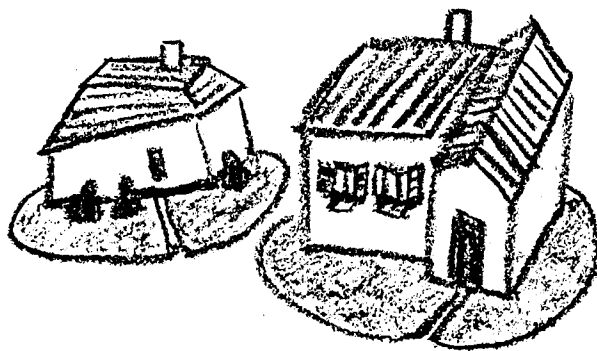
――外出の際、親と衝突しませんでしたか？

Aさん しませんでしたね。月一回ですし、妹が母がついてきてくれて時間に迎えにきてくれました。ここへはとも重度の人がタクシーで一人通ってきたり、また結構、重度の人たちが結婚されていたし・・・集まる女性たちがすごくきれいに見えましたね。とてもおしゃれして来られていましたから。私は家にいるときはパーマもあてていませんでしたし・・・能勢のキャンプではお互いにできないことは「して」という。いった言葉がすぐ受け入れて貰えたのでここまではいっていいのかと手探りしながらも安心しました。――ここで新しい世界が広がったのですね。そして結婚・・・

Aさん 結婚を控えた女性が毎日に美しくなっていくのを見て女性として私もあのようになっていきたいなあと思っていました。そして結婚して親と同居しましたが、台所と家計は別でした。

――そしてお子さんが生まれて・・・

Aさん 母が張り切って「子育てをしよう」といつてくれました・・・子供が二・三歳のとき、私の病気が再発して入院を二、三度繰り返しました。外へ出て身体も丈夫になっていたの思ってもみませんでした。それからの私は今までのように動けなかったのですが、母が旅行の時などは近所の人々が子供を幼稚園へ送り迎えしてくださったり、主人が子供の世話や掃除をしてくれました。



――お子さんとの危機は？

Aさん 小学校の頃までは私の母がすべてやってくれました。中三のとき、一度、用事で長池へ子供と二人でいったおり、はぐれたため、さんざん探して回っていたら、先に家へ帰っていたということがありました。親について歩くのが嫌な年頃だったのでしようが、いくら逃げだしても私はあなたの親なのだからと言ったことがあります。このときは一週間近く、口も聞かない状態でしたが、それ以来、気まづくなっても仲直りのきっかけを掴むのが上手になりました。またこの中学二、三年の進学問題が話題に上るころから、保護者会へは私がいくようになりましたが、子供は先生が一階の部屋で面談出来るように頼んでくれ、職員室や応接室で先生と会いました。ちょうどその頃、市立婦人会館で社会福祉の勉強をさせてもらって私自身も変わったときですね。子供が高校に進学してからは友達もよく連れてきましたし、文化祭へも行きましたよ。

――最後に人との交わりのなかで何が大切だと思われれますか？

Aさん 言葉の裏や表を読み取るので

はなくて、その相手そのままを受け入れること。その積み重ねが大切だと思います。また、初めて出会った見知らぬ人が実は私の友人の知り合いだったというように人とのつながりというのは本当に不思議なものだと感じています。一期一会という言葉がありますが、人との出会いは大切にしていきたいとおもいます。

とてもあたたかい家庭、そして友人や地域の人々。家族との深刻な葛藤もなく、自然に自立を果たしたAさん。親の庇護のもとからの親離れ・子離れのありかたについてこれから考えていきたいと思えます。皆様のご意見をお待ちしております。



雨で流れた「ダッハらんど」での出会い

△サロン・あべのV五月の会いは、新緑薫る五月二〇日(土)に堺市大仙公園で開催されていた(平成元年三月一九日〜五月二一日)堺市制一〇〇周年記念事業であるオランダフェスティバル「ダッハらんど」で大阪へ見学に行く予定であったが、雨でやむなく「ダッハらんど」行きは中止とした。



雨は土曜日がお好き?

富田慶子

今年度に入って△サロン・あべのVの行事は雨にたたられていた。四月しかり。

そして五月の「ダッハらんど」行きしかり。毎月の出会いを楽しみにして、その日を空けて待っていて下さる方々のお顔を想う時、いかに自然の流れとはいえサロンの

出会いの当日の雨は心が痛む。まして今回の「ダッハらんど」行きは三月初めより企画検討されて実現の運びとなったものであるだけに残念の一語でかたづけられない思いがある。

これまでも見学会は年一度実施してきたが、午後二、三時間で気ぜわしい思いがあったので、今回は季節も場所にも恵まれているのでゆっくりしたいと朝から出かける案を練った。交通の便は、JR阪和線で行ける。もより駅の天王寺駅、南田辺駅、百

舌鳥駅ともスロープで車イスでも行きやすいから現地集合案で固まっていたところ、身障者用リフト付き自動車が貸し出される



という朗報が入ってきた。西田辺から車で行けるとなれば広い範囲の身障者に呼びかけられると行動案を車組とJR組に分けて行くことにした。そうなるかと車で行くこと駐車場はあるか。会場内に車イストイレはあるか、会場での車イスは借りられるか等々

心配事が出てきた。さっそく「ダツハラんど」事務局に問い合わせたところ、快く答えていただき、場内地図や周辺の駐車場地図等が送られてきた。車イス四台も未来ゾーン入口で準備して下さるとのお返事をいただいた。又、グループで行動されるなら見学の便宜も図ってあげようと温かい言葉もいただいた。準備が整う程に参加申込みや問い合わせが多く入ってきた。中に「一四〇〇円の入場料がお弁当付きでなぜ一〇〇〇円なのか」というお尋ねがあった。

ハサロン・あべのVの会計を心配下さったお氣持が嬉しかったが会費を決める時、「不足分は夏のバザーでがんばりませ」という力強い委員の言葉に会計さんも納得の話であった。参加者がふえるにつれ、介助者の心配が出てきたが手が足りなければと急遽ボランティア参加を申し出て下さった方、堺の地元にお住いの方が、手はい程いいからと、西田辺まで出向くといってくださいたり健常者の皆様には色々とお心遣いをいただいていた。「万博以来の博覧会行き」、人の混雑を心配しながらも「良い機会だから」「今話題の催しだから」等々、多くの方々の思いが集って「ダツハ

らんど」行きは楽しい夢となって拡がっていった。

当日の朝、雨は降り続いていた。それでも、もしかしたら晴れるかもしれない、行けるかもと、希いを持って刻々と時間と空模様を追ったが雨は止んでくれず、参加申込み者の熱き思いは雨と共に流れ去った。

この日を迎えるにあたり、色々ご心配いただいた皆様には「中止」の一言で五月のハサロン・あべのVの出会いが消えてしまったことを深くお詫び申し上げますと共に、なぜ「中止」になったかを、今一度考えてみたいと思う。

五月二一日に「ダツハラんど」は終わった。主催者の子想をはるかに超える九四万人の入場者があったとか。これにプラス二五名の想いも加えておきたい。



おしらせ (5)

原田 仁

第四話

子供をだしにする話

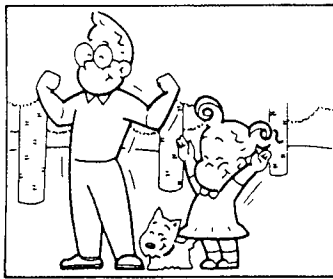
僕が仕事をしているある町のことなんです。が、「町民総ぐるみ 青少年育成町民会議」っていうのがあるんです。

どんなのかという名前のとおりで、子どもたちを非行などの問題から守って健全に育てていこうというもの。その町は新しい住宅の開発などが活発でどんどん町が変わっていく。若い家族なんかが増えてきているので、子どもも増えてきている。そういうわけで、今後の町のことを考えても子どもたちがどのように育っていくかというのはとくに重要な問題なわけです。

子どもについてのことだから、一応教育委員会が音頭をとってはいるんだけど、この町の町の組織としては面白いなあと思うのは、「各町内会から二人ずつ」みたいな感じで無理やり選ぶのではなくて、何度も話し合いをしながら本当に理解してもらっ

て参加してもらってるんです。つまり、この会は青少年の健全育成を目標にしているんだけど、いちばんの狙いは大人たちが自分たちの町についてじっくり話し合える場をつくっていこう、そのためのとっかかりのテーマを町民みんなが関心があつて理解しやすい子どものことにしたということなんです。

まちの人が同じ問題で話し合おうというのはなかなかむずかしいことですね。あべのだったら何をテーマにしましょうか。一度考えてみてください。



おしらせ

△サロン・あへの7月の出会い

日時 平成元年七月十五日(土)

午後一時～四時

場所 育徳コミュニティセンター

二階研修室(ホール、車庫あり)

「阿倍野区阪南町五一―五―二八」

内容 「わたしのコミュニケーション」

――主役はあなた――

手話通訳有り

会費 なし

問合わせ 電話…06-6911-1028

(富田慶子)

井感謝します 井

カンパ・切手・バザー用物品など、ご協力ありがとうございます。

お礼を申し上げます。

五月のカンパ合計五〇〇円

秋野富美子・出口正敏・水戸春子・

森下公子・柳生幸子・匿名様一名

(敬称略)

旭 純 子



ろうあ運動の現況

四・参政権保障運動

昭和四十二年、この年、手話通訳付き立合演説会が実施されたが、五十八年、公職選挙法改正により立合演説会は廃止され、その後、聴覚障害者の参政権保証運動は政見放送に手話通訳を求める新しい展開を見せている。

財団法人全日本聾啞連盟は昭和六十八年六月、テレビ政見放送に手話通訳または字幕を挿入し、ろうあ者の参政

権を保証するよう要望をまとめ、自治省に提出したが、公職選挙法の規定に合わないなどの理由で実現されなかった。そしてその六月の政権放送においてろうあ候補（東京）の放送に字幕・通訳がつかず、NHKテレビは手話のみの無言放送、TBSテレビは事実上放送中断状態となり、ろうあ者のみならず、一般選挙権保持者にも大きな衝撃を与えた。各マスコミは一斉にこの問題を報道し、全日聾連も六月三十日テレビ政見放送について手話通訳を挿入することについての再度の抗議と要望を自治省に提出すると共に、各都道府県協会に選挙管理委員会への交渉を指示し、今後も運動を継続する方針をきめた。

全日本手話通訳問題研究会でもこの事態を重視し、八月の広島で開かれた第十九回全通研集会ではこの問題を急遽分科会のテーマとして取り上げ、現状報告と討議を行った。自治省側ではこれについて参政権保障の意義は理解しているので誠意を持って検討するとの考え方を示しており、今後の動向が注目される。

——ボランティアの集い——

平成元年五月二十七日（土）午後一時三〇分より育徳コミュニティセンター研修室に於て、平成元年度第一回目のあべのボランティア・ビューローの「ボランティアの集い」が開催された。

毎月の集いについて、各担当者別のグループに集まり、今後の活動について話合う。

六月の集いは、植松氏の担当でビデオ観賞。「地域のボランティア活動」「おふくろに脱帽」を観て後、地域福祉とボランティア活動等について話合う予定。

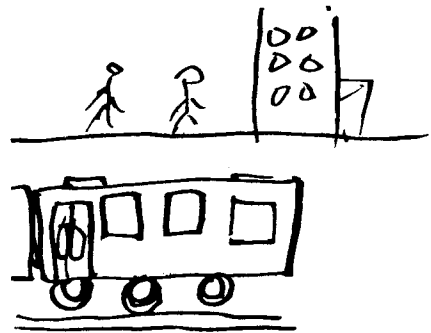
*参加等の問い合わせ先はあべのボランティア・ビューロー ☎ ☎ ☎ 六二八一三四三四



コミュニケーション拒否症候群

②

上平 幸雄



コミュニケーションの方法としては、言葉と文字、それに直接自分の体を使って表現するボディランゲージなど、いろいろなものがあると思います。

体でコミュニケーションをする、ボディランゲージとは少し違うかもしれませんが、障害者が街へ出るといふ、そのこと自体がコミュニケーションだと思ふことがあります。障害者は外出することで社会とコミュニケーションしているのです。外出は社会に対して障害者への理解を呼びかけると同時に、障害者自身が社会について学ぶ場でもあるのです。

前回、通行人に「手伝って下さい。」と

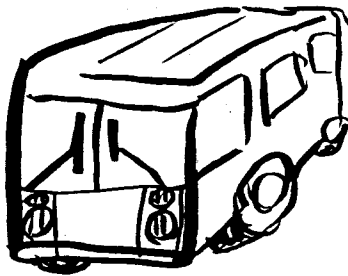
声をかけられないばかりに、地下鉄やバスを利用しない話を書きました。

なぜ声をかけられないのか、自分でもはっきりとはつかめていません。でも、よくお母さんが子供に対してあたり前のようにしつづけている「自分のことは自分でしなさい」が、ほくの頭の中にもしみついているようです。自分のことは自分でする。逆に言えば、自分でできないことはするなということです。人の手をかりてまで地下鉄に乗りたくない。それなら自分で運転できる自動車の方がいい。これが本当のところでは、人に迷惑をかけない。これも同じように、障害者の行動を制約してしまう考え

方です。こういう一般には常識と思われる考え方が、障害者を家の中に閉じ込めてしまふのです。

障害者にとって、こういう考え方はマイナスであり、人の手をかりることは少しも悪いことではないはずす。

障害者をもっともつと外出して、人とコミュニケーションをし、街とコミュニケーションして行くことで、みんなの考え方も変えて行けると思います。自分自身、えらそうなことは言えない立場ですが、少しずつでも変えて行けたらと思っています。



なんとか してらば

山本篤江

銀行の自動支払機



最近、異常なスピードで、伸びてきているカード。銀行・電話・電車の切符まで、カード、カード、タマリマヘン。

便利なことも、あるんですけどね。その中でも、銀行の自動支払機はなんとかしてエナ。

まず、階段のない銀行を捜し、やっとの思いで機械にたどり着いたら、カードの入れるところが高い。でも係の人にお願いするか、何とか一人でするんです。それは、銀行の中の機械のことです。

問題は、デパートなんかにあるキャッシュ

カードコーナーの小さなボックスなんです。通りがかりの人をお願いしようと思うのですが、お金なので、恐いです。ですから、使わないというより、使えません。

自動支払機というのは、あんなに高くしないと、いけないのですか。そして、あんなにスマートにしなくてはいけないのですか？

又、目の不自由な人達は、私達車椅子の者とは違った不便さがあると思います。

銀行さん、郵便局さん、ナントカシテエナ。

＊～おもちゃ図書館～＊

カラフルな木のおもちゃ、クッション積木、大型ブロック、ミニボウリング、トランプ等々、楽しいおもちゃがいっぱいの「おもちゃ図書館」が開催されています。

場所 大阪市身体障害者スポーツセンター

遊戯室「東住吉区長居公園」

日時 五月二〇日～七月一五日までの

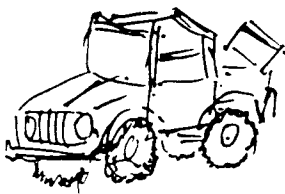
毎土曜日午後三時～四時三〇分

対象 小学生までの障害児と保護者（要同伴）、その兄弟友人については小学校低学年まで。

利用申込み 同センターTEL〇六―六九七―

八六八一おもちゃ図書館担当・千葉

注意 万一事故があっても応急処置のみ。



ありくいの話

『パパア、鳥さんも夢をみるの?』と、蟻食(ありくい)の子どもがベッドのなかで、お父さんに問いかけるテレビ・コマ・シャルがある。かわいらしいアニメのコマ・シャルだから、知っている人も多いだろう。蟻食のお父さんは『そうだよ、鳥さんも、星さんも、みんな夢をみるんだよ』と答える。子どもは、ふうんと、うなづく。そして『パパア……』と、また次の問いを問いかけようとする。そこで、コマ・シャルは終わっている。

その、かわいらしいコマ・シャルに、ぼくは今日、ギクツとしてしまった。蟻食の子どもが『パパア、蟻さんも夢をみるの?』と言っているように聞こえたからだ。鳥(とり)と、蟻(あり)では、一字違い、そんなふうには聞こえても不思議ではない。

『蟻さんも夢をみるの?』と聞かれて、

蟻食のお父さんは『そうだよ』と答える。蟻食の子どもは恐ろしそうに毛布をかぶりなおす。『パパア……』と、震えるような声で、蟻食の子どもは次に何を聞こうとしたのだろうか。

『蟻さんが見る夢ってどんな夢なの?』『やっぱり、ぼくやお父さんに食べられる夢?』『それとも、もっと大きくなって、ぼくたちをやつつける夢?』『蟻さんもひとりひとり違う夢を見るの?』

蟻食の子どもは、その次の朝から、どうするのだろうか。その子は、いままで一日に『蟻さん』を何百匹も何千匹も食べていたのに、もう一匹も食べられないかもしれない。『蟻さん』を何百匹も何千匹も食べてしまうことは、何百も何千もの夢を食べてしまうことになるのだから。

蟻を食べられなくなってしまった蟻食の子どもは、やがて、あの暖かいベッドに一日中、寝てしまうようになる。そのとき、蟻食のお父さんは、どんなことを言っ、子どもにもう一度、蟻を食べさせるようにするだろう。

『あれは、嘘だったんだよ。蟻はね、夢なんか見ないんだ』と言うのだろうか。しかし、夜の空高く小さく光り、ほとんど動かない『星さん』だって、夢をみるのである。地上で自分たちと同じように動いている『蟻さん』が夢をみないわけがない。

『蟻さんはね、蟻食に食べられるために生まれてきたんだから、食べていいんだよ』と言ったらどうだろう。しかし、口の

なかに入っても、必死になって逃げようとしている『蟻さん』が、喜んで食べられようとしているとは、どうしても思えない。『おまえの口を見なさい。蟻食の口は蟻しか食べられない。この長細い口では、木の葉や木の実を食べるわけにはいかないんだよ』と優しく言えば、子どもは自分の口を見て、お父さんの言うことが正しいことを知るだろう。こんな長い口と糸のような舌で、蟻以外に何が食べられるというのか。

蟻もそれぞれ自分たちと同じように楽しい夢、悲しい夢を見るのだと知った蟻食の子どもは、自分がひとつの夢を見るために、一日に何百も何千もの蟻の夢を食べていかなければならないことを理解する。自分のひとつの夢は、蟻たちの何百、何千という夢のすべてよりも値打ちのあるものなのだろうか。自分の命は、蟻たちの何百、何千の命よりも値打ちがあるのだろうか。

自分のこの蟻しか食べられない口は、神さまが与えたものなのだろうか。神さまは自分に蟻を毎日、何百匹も何千匹も食べなさいと言っているのだろうか。神さまは、蟻食の命は蟻よりも何百倍も何千倍も値打ちのあるものだという計算をしているのだろうか。そうだとしたら、そんな値打ちは、自分たちのどこにあるのだろうか。

蟻食の子どもは、お父さんから聞いた昔話を思い出す。蟻食も昔は、こんな口をしてはいなかった。しかし一匹の蟻食が、蟻を食べはじめ、そしてその子が真似をして

編集後記

目の見えない人は、往来を歩く時、自分の足音を頼りに歩くのだそうだ。自分の足音ははっきり聴こえるかぎりまっすぐに歩くことが出来る。車や人通りの多い道路では、騒音に自分の足音がかき消されて、蛇行してしまうのだそうだ。

何んの手掛かりもない、だだっ広い空間、その上前後左右斜めとあらゆる方向から人々が気ぜわしそうに歩いてきては、又通り過ぎてゆく。こんな地下広場では方向を失って、必死に動くゼンマイ仕掛けの人形のように、やっと前に進んでいるという歩き方になってしまう。視覚障害者から聞いた話である。

(石)



<サロン・あべの>第36号

発行日 平成 元年 6月17日(土)

発行・編集<サロン・あべの>運営委員会

[大阪市阿倍野区阪南町6-3-26

電話(06)691-1028富田慶子]

印刷 セルフ社 電話(06)691-2365

[阿倍野区西田辺2-2-10

グレース鶴ヶ丘101号]

定価 ￥62.

蟻を食べ、そして、その子どももまた蟻を食べ、ということを繰り返しているうちに、蟻食の口は、蟻しか食べられない口になつてしまつたのだ。その子に子どもが生まれても、やはり、こんな口をもつて生まれるはずである。

も何代も続けていけば、一日に何百も何千もの命を奪うしかない長い口を神さまに返すことができるのではないだろうか。自分たちの親の親の、そのまた親の、ずっと昔の先祖から、あたりまえのように受けついでしまつた恐ろしいことは、小さな子どもにさえ、すでに受けつがれてしまつてゐる。それに子どもが気がつき、その恐ろしいことから逃れようとする、親と全く違う生き方を選ぶことになる。その生き方を、親から与えられた身体で貫こうとすることは、その子どもの命さえも奪つ

てしまうかもしれない。しかし、それをしないことには、恐ろしいことから自分たちの一族は永遠に逃れられない。「蟻さんも夢を見るの?」というように聞き違えたのは、テレビを見ているぼくであつた。コマージュのなかの蟻食の子どももまた、そんなふうに関き違えたのなら、それはその子にとって、幸せなことなのだろうか、それとも不幸なことなのだろうか。ほんの十秒ほどのコマージュを見たあと、そんなことを考えていた。

(知)